

京鹿子



11月号

豊田都峰

渚響集 その二十七

石ばしるしぶきとあそぶ青かへで
燕反り去る一礼を野に川に
燕去ぬあと追ふごとく川風止む
燕去に川すぢはやくくれそむる
さはやかに一山置いて野の明くる
明けの星自在に露をくばりゐる



露こぼれ月日はなべてひと色に
おはぐろのみちびくあたり夕霧墓
月の出へいちの名のりは山の萩
月の出や手入れの松の傾ぎぶり
筆記具は濃い目好みや水澄める
水の澄む里山雲をひとつ置く
鮭のぼる日は雲さわぐこともなく
なでしこへ径またまがることもして

立秋

丸山佳子

秋立ちし疊さらさら掃きいだす
今朝秋と出てゆく夫にまづ言ひぬ
初秋や無垢の女の瞳に耐へず
鴟の聲天へつゝぬけうれしき日
鴟鳴いて朝の味噌汁沸騰す



秀華採集

白亜紀は海だった森蟬しぐれ

山中 志津子

時間的遠近、海がたいへん広がり末期にはアルプス造山運動もあった「白亜紀」と「蟬しぐれ」の今との対比の中に自分を置きながら億千単位と数日の時間やそれに準ずる生命にも思いを致している。

風船を翔たせてのひら風に乗る

菊池 和子

叱られたことなき父の墓洗ふ

井尻 妙子

前句は突き上げた「てのひら」の力の残像をうまく具体化している。後句は一つのことを取り上げながら、父親像の全体をもうかがわせる詠いぶりがよい。

鈴鹿 仁

紅 萩

蚯蚓鳴く世を裏返すこともよし

尻腰に缺いつちよう菊師老ゆ

追憶の翳をさらひし芋あらし

慰めの言葉はいらずとろろ汁

紅萩の紅とは神の彩ごろも

近 詠

和田 照海

八 月 忌

どんこ舟みづき八月十五日

防空頭巾脱がず母子の八月忌

鬼の子のちちと嘆きて母遠し

屋根裏の梁の縄目や走馬灯

高木智悼む

折鶴の色褪せ夏を惜しみけり

神麓集



假眠中 北村 香朗
涼しさや九十四才假眠中
巡り来る伴侶もなくて原爆忌
八月六日空いつばいに鳩の発つ
油虫憎悪の一字生きのがし
油虫一心込めて打ちてをり

宮相撲 藤岡 紫水
恩讐は遙か彼方へ銀河濃し
紅芙蓉暮るるに間なき鳩の湖
行司役いま何代目宮相撲
男らも腕に化粧し風の盆
一病を持ちて息災生身魂

松田 都青
故里の風で飛びたき夏帽子
涼しげにふの字ふんわり坐りある
手の内の讀めぬ僧侶と見る火花
哀れとは塾の中での子の昼寝
生命の波打ち際に来て涼し

(前月号) 松田 都青
笑へない猫のさびしさ梅雨の月
念仏が棒になるまで夏勤め
見る人に山が近づく半夏生
父母に会ふいつも螢の闇の中
何回も家出する猫夏籠り

残菊の章 竹貫 示虹
燭^ひともして翳生まれけり残り菊
時雨の夜次第に辛き土佐の酒
小春日の藍のつぶやき甕に満つ
竹人形目の一線の冬はじめ
竹人形髪^の先から冬に入る

晩 夏 柴田 朱美
晩夏だるし失せもの失せしままにして
はらからの綻び縫つている晩夏
空瓶の百本積まれたる晩夏
また一軒店を閉めたる晩夏光
組み替へてゐる間に逃げる晩夏光

神麓集



露

丹生をだまき

スポーツ番組ただ坐して見て夏長し
陀羅尼助の靈驗頼み夏乗り切る
清滝の夜気ふるはせて河鹿鳴く
かなかなの波うつやうに聞こえくる
芋の葉の露ころばせて風遊ぶ

山田をがたま

寝返りの痛さやゝ減り八月果つ
九月に入り歩行練習日に二度す
颯風禍に胸を痛めて星仰ぐ
額替へて秋の気配を先取りす
茜雲写しきらめく河澄める

銀

河

丸井

巴水

惚れ込めば蛇も鳴くなり神少女
サイダーの可愛い泡が喉過ぎる
後ろより目隠しされて銀河濃し
約束は螢にあへる橋とせり
天の川逆さ浮きたる山の小屋





京鹿子集

豊田都峰選

昼顔の語り尽くせぬ私小説

一身上の都合しかじか土用の芽

白亜紀は海だつた森蟬しぐれ

苦瓜を割り分身にめぐり逢ふ

風船を翔たせてのひら風に乗る

駄句六句まあまあ三句桃一つ

卵の花やゆつくり溶かす角砂糖

アメンボーたまに深潜りでもするか

人違ひして万緑の外に出る

梅雨星を数ふ素直になれるまで

京田

山中志津子

京都

菊池 和子

井尻 妙子

遠汽笛回転椅子の夏に向く

叱られたことなき父の墓洗ふ

日米の境目は無し花みずき

夏休み課題に恐竜貯金箱

バターフライ二十五メートル日焼けの子

本心は何処にありやサンダラス

油照り草刈る人に容赦なく

片蔭に憩ふ人夫や午后三時

落ち蟬や舗道に落ちてなほ蹴き

打水に一時布施者の気分かな

アリソナ

伊吹 之博

酒田 藤波 松山

赤城を背に円虹くつきり農夫婦

渋川 東 秋茄子

心太無口もおしやべり帰途早し

生きること死ぬこと墓の目の左右

名高きにシヤツターの列バラの園

白茅原まぼろしの馬嘶けり

大家族梅雨の晴れ間は干し場取り

いいひとのままてふうせんかづらかな

産地問ひサラダ注文夏野菜

さいたま 神田 惣介

梅雨入りやシエフの制服のり立ちて

あすばらがすめらんこりいれたすサラダ

山笠や子等も水浴び山車を追ふ (博多祇園山笠)

凌霄花知らない国を探してる

追山や男等気構五秒前

浴衣とて背筋のばして添ふ着付け

立秋や亡夫と次第に齡離れ

井沢ミサ子

夕焼の棚引くを見つ廊の杖

灯の一つ見上ぐ飛行機夕涼し

土用凧さそひなかりし配りよかも

ふと聞きつ木蔭に入りし法師蟬

祭太鼓腹にひびくや總踊り

戸田 中村江利子

梅雨晴れ間大きく放つ東窓

夏の雲また父親を好きになる

すつぽりと梅雨雲のなか安眠す

葛切や少し淋しい猫とゐる

折鶴の嘴きりり炎暑かな

鬼灯の熟れ三分なり雑司ヶ谷

透明ないるかの風鈴細く鳴く

炎天や微妙にずれる句読点

天地創造しんがりに雨蛙

嘶家の寿限無に遊ぶ汗を噴き

昭和史の頁駈け抜く黒揚羽

白金や歩き飲みして暑氣払ふ

涼やかに鉄剣刻す古代文字

おいと言ふ声にふり向く梅は黄に

城跡の朝顔にして撓まざる

越後路の青田煌めく日照り雨

翡翠の川ばかり見てゐて孤独

六道の辻めぐり来る白日傘

伊藤 希眸

仕舞湯の泡沫にゐる夏の月

鯉と穴子おなじに見える横須賀線

稲の香の寝た子に歌ふこもり唄

直江 裕子

岡田 愛子

佐々木紗知

布川 孝子

高野 春子